西会津町の歴史　－野沢編－

１．化け桜と本海壇

江戸時代の野沢宿は越後街道三大宿場の１つとして繁栄を極めた。会津藩から六斎市を開くことが許され、新発田藩・村上藩・村松藩などの殿様が参勤交代の時には宿泊する宿場であった。十返舎一九が『越後路之記　金草鞋』の中で野沢宿の様子を次のように書いている。「ほどなく野沢の駅につく。塩屋という宿（うち）より留女（とめおんな）出て引きとめければ、ここに泊まりて、『三味線の 野沢の宿は 旅人の 袖を無性に 引いてとどめる』」と他の宿場では見られない狂歌を詠んでいる。これは大山祇神社の門前町でもあったため、歓楽的賑わいがあったのであろう。こんな賑わいの野沢宿の陰に２つの悲しい話があった。

野沢宿内を通る越後街道は時代によって替わっている。これは最も古い時代の街道脇にあって、越後方面から来た旅人が野沢宿に入った目印にもなっていた桜にまつわる話である。

ある年の桜が満開の頃、宿場に売られてきた１人の娘が毎日の旅人相手の辛い勤めに耐えかねて、この桜の枝で首をくくって死んでしまった。哀れに思った村人は、娘の遺体を桜の根元にねんごろに葬ってやった。翌年、また春が巡ってきて、桜はいつものように満開となった。人々は満開の桜を見物にやってきて驚いた。なんと、桜の花はいずれも花の中から舌を出していたのである。その花の恐ろしさに人々は酷使された娘の怨念が桜の花に宿り、こんな花を咲かせたのだろうと噂しあい、それ以来この桜を「化け桜」と呼ぶようになったという。

幹も空洞化していて、中に狐が住んでいたといわれていたこの桜も、風雪に耐えていたが先年の大雪でついに途中から折れてしまった。今は折れた幹の脇から出てきた若枝が伸びている。

次は、化け桜の話よりもう少し古く、野沢宿がほぼできあがりつつある頃の話である。宿場にどこからともなく本海という

行人(修験者)がやって来て、「宿場の火事を防ぎ、ますます繁栄するように祈って進ぜよう」といって祈祷を始めた。宿場の衆は火事がなくなり繁栄するなら願ってもないことと見守っていた。高灯籠を掲げ、祈祷も佳境に入った頃、今までなかった風が吹き出し、いつしか大風となってしまった。高灯籠が風にあおられ宿場の屋根に飛び火して、あれよあれよという間に火の粉が飛び散り、宿場は火の海と化してしまった。怒り狂った宿場の衆は、呆然と立ち尽くす本海を宿場はずれの田沢川を越した荒野に引きずり出し、生き埋めなどのむごいことをしたのでないだろうか。それからというもの、やっと宿場を再建したと喜んでいると、毎年のように火事が起こり、人々は苦しんだ。それで陰陽師に占ってもらうと、本海の怨念が成仏できず、さまよっている祟りであるという。宿場の衆はそれから毎年７月 15・16 日の夜、家ごとに高さ６間の高灯籠を掲げて、本海の霊魂を慰めたそうである。さらに禍転じて吉祥にするため本海を火防鎮火の聖人として壇を築き、「お聖人様」として崇めた。

『旧記書』(喜島屋山本定平著)によると、明和 6 年(1769)頃、田沢川火防聖人の塚は毎年８月 18 日にまつりや相撲・狂言・太神楽・念仏踊りが行われ、近村隣郷の人々が大勢集い、たいへんな賑わいであったという。いつの頃からか高灯籠や太神楽などはなくなり、奉納相撲だけが昭和 30 年代の初め頃まで行われていた。昭和初年頃は、触れ太鼓や新町の聖人様入口に組まれた櫓太鼓が打ち鳴らされ、近郷近在から集まった人で狭い本海壇は埋め尽くされ、出店も出て大賑わいであった。

往時の化け桜（平成 26 年撮影）

聖人様の本海壇の全景

２．如法寺と大山祇神社のいわれ

如法寺観音堂

仏都会津といわれるように、会津は古くから仏教文化が栄えた土地であった。大同２年(807)、徳一大師が磐梯山麓に恵日寺を創建し、会津に仏教の教えによる理想郷を作ろうと会津の各地にお寺を創建し、仏教を広めた。如法寺はその１つで、会津の西方に位置する当地は越国と陸奥国の境にあり、境を守護し、会津の西方浄土を守るためにどうしても必要なお寺であったのではないだろうか。如法寺は西部を治める修験道場であったので、山の神と神仏習合の山として、また、浄土信仰の霊場として発展した。そのため観音堂の構造が変わっていて、東西に御拝口があって三方開き、四方に上がり口がある日本唯一の観音堂である。東から上って堂に入り、北の宮殿に向かって御本尊聖観音を拝して西に出る。西の山には山の神が鎮座し、その彼方は西方極楽浄土である。この如法寺は鳥追観音(とりおいかんのん)として有名であり、これにまつわるこんな話が伝わっている。

時は天平２年(730)、芹沼という所に年老いた夫婦が田畑を耕して暮らしていた。ある秋の夕方、旅の僧がやって来て、「日が暮れて困っているので今夜一晩泊めてもらえないだろうか。」と２人に頼んだ。老夫婦は快く承知し、何もないが心からのもてなしをした。翌朝、僧は丁重にお礼を述べ、「何か困っていることはないか。」というので、老夫婦は「私たちには田んぼが数百畝あるが、ちょうど稲が実った頃になると小鳥がやってきて、みなついばんでしまい本当に困っている。それさえなければ食料に困ることはないのだが。」といった。僧は笈から小さな観音像を取り出し、「この像に鳴菅を繋いで田の畔に置けば、鳥の害はなくなるだろう。」といって旅立った。老夫婦はいわれたとおりにすると、小鳥たちがきてついばもうとすると鳴菅が鳴るので、小鳥たちは怖がって近づかなくなった。それからこの田んぼを鳴沢田と呼び、肥料を与えなくてもよく実ったという。やがて老夫婦が亡くなると、観音様は自ら大川(阿賀川)の淵に飛び込んだ。19 年後の大同元年(806)、弘法大師と徳一大師がこの淵を通りかかると、観音様は弘法大師の手のひらに移った。弘法

大師は徳一大師によい場所にお堂を建てて安置するよういい残して旅立って行った。徳一大師は西平の方に瑞雲がたなびくのを見て、観音堂建立の地とした。それからこの観音様を「鳥追観音」と呼ぶようになった。

また、山の神様(大山祇神社)の由来にはこんな話がある。宝亀９年(778)頃、大和国宇田(陀)郡宮崎の人で真海という法師(修験者)が大久保の松原山の麓、地蔵屋敷(本社参道の弥作の滝の上)といわれる所に庵を結んだ。ある夜、真海の夢枕に三島明神が現れて「吾を松原山の山神として勧請せよ、さすれば吾を祈念する者には一代に一回は必ず願いを聞し召すべし」と告げた。そこで真海は心行滝(不動滝)で17 日間の水行を行った。満願の朝になると、今度は大聖不動明王が現れ「汝の念願しばらく怠ることなければ、末世に至ってもこの山の神霊を祈る者には怪我過ち無く守るべし」と告げるので、真海は松原山に登って二夜三日の祈祷を行った。そして地をトして祠を築こうとすると、杉の根方から五彩の幣帛(へいはく)が現れた。真海は歓喜して、翌年石龕(せきかん)を建て、御遷宮式を執り行ったという。この真海法師はその後いずこともなく姿を消したので、里人は生国の宇田へ帰ったのであろうといい合って、松原山を「宇田(陀)帰山」と呼ぶようになったそうである。

なお、真海法師の生国と伝えられる大和国宇田(陀)郡には室生寺があり、修験道の始祖といわれる役小角(えんのおづぬ)が開創と伝えられ、真言宗の道場である。如法寺と大山祇神社にはその昔、深い繋がりがあったのではないだろうか。

大山祇神社　遙拝殿（左）と本社（右）

如法寺観音堂
大山祇神社
（遙拝殿）
大山祇神社
（本社）
大山祇神社
（奥の院）
水沢
安座
関根
中野
西牛
四岐
下牛尾
上牛尾
田口
長谷川
出原
下谷
赤羽根山
台倉山
不動尊
弥作の滝

３．研幾堂の偉人たち

（1）渡部思斎

渡部思斎

天保 3 年(1832)、野沢原町で旅籠を営む家に生まれる。8 歳の時に父と死別し、盲目の母を助けていたが、聡明であったため、代官より若者頭を命じられる。その後、会津藩校日新館医学寮で学業を修め、「思斎」の医名と「渡部」の名字を名乗ることを許される。野沢原町の自宅に研幾堂医院を開き、私塾「研幾堂」も設け、法政・経済・文学・医学の４科を二百数十名にのぼる塾生に指導した。慶応 2 年(1866)、日新館医学寮の学監に招へいされたが、郷里の子弟の教育にあたりたいとこれを辞退。この塾から後述する明治黎明期の日本で活躍した多くの人々が誕生した。初代野沢小学校長を務め、県民会議員に当選して県令三島通庸に門下生の山口・小島・石川らとともに抵抗する。明治 22 年(1889)、県会議員立候補者推薦演説中に卒倒し、他界する。57 歳であった。大正 12 年(1923)、旧研幾堂門下生によって顕彰碑が建てられた。

(2)石川暎作

安政 5 年(1858)、野沢本町村肝煎石川家の三男として誕生。研幾堂で学んだ後、明治 6 年(1873)、高島英学校(脩文館)・慶應義塾・共立学舎で学び、千葉県の訓導を経て大蔵省銀行局に入所。アダム・スミス『富国論』とヘンリー・G・ボーン『泰西政事類典』の翻訳をはじめ、婦人束髪運動の提唱実践者として日本の学問･文化の振興などに大きな貢献をした。エコノミストとして政府の経済政策とペンで戦うが、結核が悪化し、同 19 年(1886)、28 歳の若さでこの世を去った。顕彰碑がふるさと自慢館の裏にある。

石川暎作

(3)野沢雞一（けいいち）

嘉永 5 年(1853)、野沢原町村北分肝煎斎藤家に生まれる。慶応 2 年(1866)、研幾堂に学び、翌年、蘭学を学ぶため長崎に向かう途中の京都で山本覚馬と出会い、そのまま山本邸に住み覚馬から洋学を学んだ。薩摩藩邸の牢で覚馬の「管見」を筆記する。その後、脩文館に入学。後にエール大学で学び帰国し弁護士事務

野沢雞一

所開設。明治 32 年(1899)、神戸地方裁判所の所長代理に就任。同 37 年(1904)、東京で公証人となる。昭和 7 年(1932)、80 歳で没する。

(4)渡部鼎(かなえ)

安政 5 年(1858)、思斎の長男として生まれる。明治 6 年(1873)、脩文館に学ぶ。同 7 年(1874)、東京大学南校(医学部)に入り、同 10 年(1877)、陸軍軍医試補となる。同 18 年(1885)、石川暎作と婦人束髪運動を起こす。同 19 年(1886)、カリフォルニア大学医学部に入学。同 23 年に帰国し、会津若松市大町に会陽医院を開き、同 25 年(1892)、野口英世の手の手術を行った。近代医学に感銘した英世はそのまま書生となる。同 35 年(1902)、衆議院議員に当選。大正 4 年(1915)、帰国した英世と名誉の再開を果たし、昭和 7 年(1932)、東京で没した。享年 74 歳。

渡部　鼎

(5)山口千代作

嘉永元年(1848)、森野村肝煎の家に生まれる。研幾堂で学び、森野村戸長を経て明治 11 年(1878)に県民会議員になり、同 13 年(1880)には議長となる。同 15 年(1882)、県令三島通庸の会津三方道路開削反対のリーダーとして活躍。同 23 年(1890)の第 1 回衆議院議員に当選し、第 2 回・第 3 回総選挙にも連続当選する。その後、北海道で桑園事業、樺太で郵便輸送事業などと実業界で活躍し、同 39 年(1906)、58 歳で波乱の生涯を閉じた。

山口千代作

(6)小島忠八

安政 3 年(1856)、野沢原町の豪商の家に生まれる。10 歳の時に研幾堂に入る。明治 5 年(1872)、16 歳で野沢原町村戸長となる。同 10 年(1877)、東京曙新聞社に入社。同 15 年(1882)、県議会議員となって会津三方道路開削に抵抗し逮捕されるが、無罪となる。その後、トテ馬車の野沢－若松間運行・中牛馬会社(運送業)の経営や養蚕講習所を自宅に開いたりして地方振興に尽力し、大正 11 年(1922)、66 歳で没した。

小島忠八

西会津町役場
常泉寺
渡部思斎顕彰碑
会館
天満宮
西会津町公民館
生活改善センター
野神社
第一分団本部
西会津農協
研幾堂跡
石川暎作顕彰碑
野沢郵便局
防災車庫
県道

４．八蛇沼の大蛇と弘法大師

野沢の街の西 5km ほどの所に下安座・関根・水沢の 3 つの集落からなる安座村があった。春や秋の安座は別世界に来たように黄緑や黄・赤の急峻な山々に取り囲まれる。このような景色のためか、あるいは地形上からか安座にはこんな話が伝わっている。

昔、安座は周囲 10km ほどもあったかと思われる大きな沼であった。八蛇沼(やしゃぬま)である。この沼には 180ｍほどもある雌の大蛇が住んでいた。この沼と大沼郡金山町の沼沢沼とは通路で繋がっていて、沼沢沼には雄の大蛇が住んでいた。沼沢沼の大蛇はこの通路から時折、美しく織り上げた織物を流したり、また、この通路を使って往来したりして２匹は逢瀬を楽しんでいた。宝亀年間(770～781)、突然大地震が発生し、沼の一角が崩れ、満々としていた水が瞬く間に流れ下ってしまった。すっかり水がなくなった時、崩れ落ちてきた大岩の下敷きになった大蛇は、もがき苦しみながら沼の底で死んだのである。一説には水のなくなった沼から近くの尾多返山に巻きついて死んだともいわれており、尾多返山をその後、「竜岳」と改めたそうである。

大蛇が死んでから、沼近くの沼岡村の人達は原因不明の病にかかり、死ぬ者が多かったという。ちょうどその頃、如法寺に足を止めていた弘法大師がこのことを聞きつけ、急ぎ八蛇沼にやってきた。3 日間、岩屋の洞窟に籠り護摩を焚き、大蛇の骨を拾い集めて地中に封じ込め、塚を築きおさめてからは大蛇の祟りは止み、疫病から逃れることができたという。

弘法大師は護摩を焚いた洞窟にお堂を建て、己の木像を彫ってこのお堂に安置し、「我、この地に末代安座する也」といわれたことから沼岡村を「安座村」に改めたという。沼沢沼に通じていたという「大清水」という清水がつい最近まであったそうで、この清水をかき回すと大雨が降るといわれ、洪水を恐れて村では固く禁じていた。それでも日照りの年には近隣近郊の村人たちが安座の人たちの目を盗んでかき回し、雨を降らせたことがあったそうである。この大清水にはたくさんの魚がいて「沼沢の魚(ぼや)」と呼び、昔から捕ることは禁じられていた。また『新編会津風土記』では、八蛇沼のことを次のように書いている。昔、この所に八蛇沼という大きな沼があって八頭の大蛇が住んでいた。上野(こうずけ)国の赤城山の神と下野(しもつけ)国の二荒山の神とが中禅寺湖の境を争った時、二荒山の神が越後国蒲原郡鹿瀬組実川に住んでいた猿丸に赤城山の神を射倒すことを頼んだ。赤城山の神が百足(むかで)となって現れたのを猿丸が

射倒した時、その百足の霊がこの沼に移ったため、八頭の蛇は大沼郡大石組沼沢村の沼に逃げたという。その後、地震があって岩が崩れ、この沼が埋まった時に長さ30ｍほどの百足は死んだ。よってその辺に村を開き、沼岡村と名付けたが、神霊が村人に祟りをなしていた。大同３年(808)に空海がここに来た時、神のお告げで残っていた水を抜き、百足の霊を宮岳という山上に封じ込め、骨を集めて１つの塚を築き馬蚿塚(ばげんづか)(ヤスデのこと)と名付けた。八頭の大蛇を竜岳に封じて護摩を修めてからは祟りは止んだという。今でも安座集落の者は日光山に行っても二荒神を拝むことはない。また、山中に宿泊しないのは赤城神のことによるという。

現在の安座集落

５．大槻太郎左衛門政通の乱

野沢本町の遍照寺は、もとは会津坂下町洲走にあったそうだが、いつ何の理由で移ってきたのか分からない。この寺は如法寺住職の隠居寺との話もある。そもそも、ここは大槻館という中世の城館跡で、延徳年間(1489～1492)の頃、伊藤長門守盛定という地頭が住み大槻氏を称したと伝える。盛定はもと安積郡成田(郡山市成田)の人らしく、なぜ野沢村に移住したのかは不明である。

会津の盟主芦名盛氏の頃、大庭太郎左衛門政通(まさみち)という者がここに住んで、大庭を改め、大槻と称した。大槻太郎左衛門の祖先は佐原十郎義連の孫の北田次郎広盛の次男大庭河内守広連と伝え、4代大庭太郎次郎政隆まで北田に住み、300貫文の地を領していた。その政隆の時、反逆の疑いで100貫文に減らされ、これを恨み、その子大庭上総ノ介政泰が一族を挙げて反抗するが、一族は討死する。この時、政泰の長男大庭太郎左衛門国通だけが加わらず、国通から4代の大庭太郎左衛門政通の時、「上を蔑ろにする」という理由で30貫文の地(『会津鑑』では野沢原町・上野尻・荒久田、『新編会津風土記』では野沢本町・野沢原町・茅本とされている)に蟄居させられる。

太郎左衛門は大槻館に数年いたが、空堀はあるものの守りに弱く、手狭であったため、守りの堅い荒井館に移る。荒井館主の荒井氏は芦名家重臣であったため、城下に居を移し、館が空いていた。荒井館は西を湿地、東を断崖、南と北を空堀で守る規模は小さいが、堅固な館であった。この館に移って3年後、下野尻・小島・夏井などの地頭らの力を借り、越後の上杉謙信の加勢を受けて、芦名盛氏に積年の恨みを晴らす企てを娘婿の西方村地頭山内右近と練っていた。右近は山内本家に次いで力のあった川口村地頭川口左衛門佐を味方につけようと密書を盲人の斎竹という者に持たせたが、斎竹は雪で転倒し密書を落としてしまった。この密書は通りかかった土地の者に拾われ、盛氏のもとに届けられた。盛氏はかねてから太郎左衛門が右近と企てをするかもしれないと考え、金白加賀守景良に縄沢村近くに館を築かせて動静を見張らせていた折であったから、盛氏はすぐさま片門の渡しに平田是亦・佐瀬不及・富田美作・伊藤大膳を向かわせ、自分も金上兵庫・生江大膳・松本左衛門・新国上総らを率いて、柳津の渡しに出陣した。

これを聞いた太郎左衛門はかねてから同心していた下野尻の薄・小島の成田・夏井の赤城等の地頭と急ぎ片門の渡しに、右近も柳津の渡しに出陣。天正6年(1578)2月13日のことであった。太郎左衛門と右近らは只見川の険阻な川岸で備

えを固め、手勢は少なくとも、散々に弓矢合戦をして２日ほどは持ちこたえた。しかし、元来微勢の山内勢は柳津の渡しを守り切れず盛氏勢の渡河は時間の問題となった。これを聞いた太郎左衛門は片門の渡しは薄・赤城らに任せ、成田とともに自ら塩峰峠(藤村)を越えて救援に向かった。15 日、援兵が到着しない山内勢はついに敵の渡河を防げず右近が自害。これを知った太郎左衛門は、一族郎党 30 余人と山道を越えて山内の領地上條から大山越えで越後に逃れようとしたが、大雪のため道もなく、空腹も重なり種子池淵（たないけぶち）という所の洞窟に身を隠して雪が止むのを待った。そこへ猟師が通りかかったので、太郎左衛門はこれ幸いと飯と草鞋を頼んだ。しばらくすると手際よく調達してきたので、謝礼として判金一枚を与え、上條へ道案内をすれば恩賞を与えるといったら、猟師は簡単に引き受けて帰って行った。太郎左衛門は猟師が来るのを心待ちにしていたが、突然鬨の声をあげながら川口左衛門佐の手勢が押し寄せてきた。多勢に無勢、ついに太郎左衛門一党は討ち取られた。

成田右馬允某(妻の説もある)の嫡子の妻が落ち延びた夫の所へ行こうとして下牛尾の村はずれに来た時、金白勢に見つかり討たれたという。『大槻家浮沈録』では芦名氏に誅されたのは大槻太郎左衛門行綱で、乱を起こしたのは嫡子行久と伝えている。

遍照寺（大槻館跡）